

ようこそ選帝侯の座する教室へ

神代リナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Bクラスにもしリーダー格の生徒がいたら……というお話。

大天使ホナミエルを救わなきや（使命感

# 目次

## 1年生編第1巻

第一話	ようこそ実力至上主義の学校へ	1
第二話	大事な説明	6
第三話	他クラス偵察	10
第四話	パルチザン育成計画（前編）	13
第五話	パルチザン育成計画（後編）	15
第六話	決まらぬ覚悟	18
第七話	偽りの蒼穹	20
第八話	本能の赴くままに	23
第九話	ネタバラシ	28
第十話	失墜のトリガー	30
第十一話	Bクラスの王	33
第十二話	優秀な参謀の確保	35
第十三話	どうしてこうなった・上	38
第十三話	どうしてこうなった・下	41

## 1年生編第1巻

### 第一話 ようこそ実力至上主義の学校へ

《1—0：とある男性の独白》

人は平等だろうか？

これは多くの人が深く考えさせられること、らしい。

しかしながら、私は大して深く考えたことはない……何故なら考えるまでもなく答えを導けるからだ。

人は確かに平等である……「神に選ばれた者たちの下で」という前提はあるが。

世の大多数の人間は似たり寄ったりな能力しか持ち得ない。だがしかし。

ごく僅かな人間は一般的な人間の能力を圧倒する能力を持っている。

まるで……神から人の上に立つことを望まれている、そんな風に見える。思ってしまうほどの。

しかし、そんな選ばれた人間も教育の質次第ではその輝きを失ってしまうのだ。

なんて嘆かわしい、なんてもったいない。

平民に粗末な教育をするリソース全てを彼ら彼女らにつき込めばそれを防げるというのに。

そんな考えを抱いたからこそ、私たちはまず“彼女”に世界一の教育を施した。

将来、愚かな人類を彼女が正しき道へと導いていけるように。

《1—1：はじめての登校》

私がバスに乗ると、中には私と同じ高度育成高等学校<sup>赤</sup>の制服を着ている少年少女たちがたくさん乗っている光景が目に入る。

ある人は本を読んでおり、ある人は外を見ている。

少なくとも、ワイワイと話しているような感じではない。

それもそうだ。

私たちは新入生なのだから、お互いを知っているわけもない。

そんなことを考えながら、私は空いている席を探す。

……あつた。

奥の方の2人席、その通路側の方が空いていたのでそこに座る。

隣には、容姿端麗でスタイルのよい少女が座っていた。

彼女は外を眺めて、何かを考えている感じであつた。

瞳が直接見えないから、彼女がどういった人かは分からない。

まあ、彼女と同じクラスになるとも限らないからいいだろう。

隣人から目を離し、鞆から書類を取り出す。

今回の課題は……はあ、めんどくさそうだ。

3年間、高度育成高等学校とやらに通つてAクラスになり、お父様の知り合いとやらが創り出した最高傑作を打ち負かさなければならぬらしい。

もちろん、普通の生徒に私の正体を勘付かれてはダメ。

本当に面倒……。

でも、ちよつと楽しみかも。

生まれてはじめて、学校に行くから。

知識としては知ってるけど、やっぱ実際に行くのとは違うはず。

……にしてもやることがないわね。

趣味の読書は本持ってないから無理。

そして、昨日夜遅くまで起きてたから眠いっちゃ眠い。

……大人しく寝るか。

私はゆつくりと瞼を閉じた。

十数秒後、私の意識は暗闇へと落ちていった。

バスによつて発生する身体の揺れがなくなった感覚を覚えて目を開く。

目的地に着いたか。

にしても、視界がちよつと斜めつているような。

ありや？ どういう……。

ああ、誰かの肩に私の頭が乗つかつているのか。

「あ、起きた？」

頭の上から女性の声が聞こえた。

頭を本来の位置に戻して、横を見る。

まあ、当たり前だが私の隣に座っていた少女の姿があった。

にしてもこの瞳……強く、善良な生徒なんだろう彼女は。

「ご迷惑をかけて申し訳ありません、昨日あまり寝れなかったもので

……」

人間観察はさせておき、私は謝罪をする。

「別に大丈夫だよー。同性どうしだしね」

……確かに、私が男だったら彼女も私もさぞ怖い思いをしたことだろう。

ろう。

人生ではじめて女で良かったと思つた瞬間である。

「ところで、もうこれ学校に着いた感じですかね？」

「そうだよ。私たちも早く降りないとね」

「じゃあ、行きましようか」

周りを見ると、確かにほとんどの人は既に降りている。

私たちもさつさとバスから降りる。

……これが高度育成高等学校。

中々大きい施設だ。

一体、いくらの予算を費やしたのだろうか？

ま、教育機関に金をかけてるのはいいことだ。

「おっきいね……ここが私の過ごす学校かあ」

と、隣に立っている少女が呟く。

恐らく私に向けて言ったのではなく、思わず漏れた独り言だろう。

「頑張らないと、ですね」

「うん。あ、そう言えば自己紹介まだだったね。私は一之瀬帆波、よろしくね!」

一之瀬帆波、か。

いい響きね。

私も自分の名前を言わないと……どっちの名前を使おうか？

ま、悩むまでもないか。

「私は霧ヶ峰きりがみねひびきです。こちらこそ、よろしくお願ひします」

自己紹介を終えた私と一之瀬さんは、大理石を加工した大きな門をくぐり抜けて学校の敷地内に足を踏み入れた。

……ここにいる少年少女たちがどの程度の実力か、見せてもらおうとしましょう。

《1—2 Bクラスへようこそ》

私は自分のクラスであるBクラスの教室へと入る。

そして、そんな私に一之瀬さんも続く。

あ、一之瀬さんもBクラスか。

「霧ヶ峰さんもBクラスだったんだね!」

と言いながら、聖母の如き清い笑みを浮かべている一之瀬さん。なるほど、私はこの瞬間初めて”尊い”という言葉を理解した気がする

「大天使ホナミエル……」

「にや?」

やっぱ、訳わからんことを口走ってしまった。

あまりにも清すぎて……。

ブンブンと頭を横に勢いよく降って雑念を頭の外へと追いやる。

……知ってる人が同じクラスに居るのは嬉しいね。  
どうやら話し相手0人の悲劇は回避できたようだ。

「知っている人が同じクラスに居て良かったです。お友達が出来るか不安だったので」

「うん、実は私も不安だったんだよね」

いや、一之瀬は大丈夫でしょ。

めちやくちや明るい子だし、社交性高そうだし。

「いやいや、一之瀬さんは心配しなくても大丈夫ですよ。絶対に友達がいっぱい出来るタイプですから」

「にやははは、それは買い被りすぎだよ」

「そんなことないと思うんですけど……まあいいや。そういえば、一之瀬さんの席は何処ですか？」

「私はちようど教壇の前の席だね」

……ハズレ席ってやつかな？

教師にずっと見られてるの辛そう。

「あー、私はあそこの席なんでちよつと遠いですね」

と言いながら、私は一番後ろの列の窓側の席を指差す。

「まあ、仕方ないよ。それにクラスは同じだから、休み時間とかならいつでも会えるし」

「それもそうですね」

そう私が答えた時、女性の先生が教室に入って来た。

結構な美人だ。

「はい、みんな席についてねー」

ちよつと緩い口調でその先生は生徒にそう呼びかける。

「じゃあ、また後でね」

バイバイと手を振りながら、一之瀬さんは自分の席の方へと行く。  
私も自分の席に座るとしよう。



## 第二話 大事な説明

「よしっ、みんな席についたね。まずは……新入生の皆さん、入学おめでとうございます。私はBクラスの担任の星之宮知恵と言います。これから3年間、お願いします」

これから3年間……ねえ。

クラスは変わらないってことか。

でも、お父様はAクラスに上がれと……はあん、なるほど。そう言うこと。

周りの人の一部の人はクラス替えがないことに気づいているようだ。

だけど、私と同じとこまで行き着いた生徒はいないようだ。

まあ、みんなは私と違ってヒントがないから仕方ない。

「では、入学式へと向かう前にこの学校独自のルールについて説明します。まずは、冊子と学生証端末を配ります」

そう言うのと、冊子と学生証端末を配り始める。

そして、全ての生徒に冊子と学生証端末が行き届いたのを確認すると、先生は携帯端末を手に取り、クラス全員に見えるように高く持ち上げる。

「これは学生証端末です。買い物や施設の利用などをする際はこの学生証端末にあるポイントを使います。この学校内では、ポイントでなくても購入可能です。毎月の初めに自動的にポイントが振り込まれます。ちなみに、1ポイントイコール1円の価値があります。そして、皆さんには既に今月分の10万ポイントが振り込まれています。もし振り込まれていないといった者は今すぐ申告するようにしてください」

10万ポイント振り込まれている。

その言葉が聞こえた瞬間、多くの生徒が動揺した。

そりやそうだ。

たかだか高校生が急に10万円もの大金を与えられたのだ。

……気になる点がある。

毎月10万ポイント振り込まれる、とは明言していない。  
怪しいね。

ま、質問してみますか。

私はサツと手を上げる。

「どうしましたか、霧ヶ峰さん?」

「星之宮先生、毎月振り込まれるポイントは10万固定なんですか?」

とりあえず、どストレートに聞いてみる。

すると……。

「それは答えられません」

星之宮先生は笑顔でそう答えた。

……なるほど、振り込まれるポイントが変動するのが確定した。

答えられないという答えが答えそのものだ。

そして、毎月10万ポイントが貰えると思いついていた多くの生徒から落胆の声上がる。

にしても、振り込まれるポイントが変動するとしたら何をしたらポイントが増えて、何をしたらポイントが減るのだろうか?

むむつ、謎を解いたら謎が増えたわね。

まあ、また聞くか。どうせぼかさされるだろうけど。

「先生、もう一つ質問です。毎月振り込まれるポイントの額が増えたり、減ったりする要因は何ですか?」

「そうですね……学生に相応しくない行動を取れば、生徒の所持しているポイントを没収されることはあるかもしれません」

……うーん、このお手本かの如き論点すり替え。

私が聞いたのは毎月振り込まれるポイントについてのことだったというのに先生が話したのは毎月振り込まれるポイントの話ではなく、生徒個人個人のポイントの増減の話だ。

やっぱりぼかさされた……ただヒントにはなるかも、先生のこの答えにしても、学生に相応しくない行動、ねえ。

どうやってその行動をしている生徒を見つけているのだろうか?

そんな厳格に生徒一人一人の行動を見張ったりでもするのだろうか?

いやはや、そんなこと出来るわけ……まさか。

私は教室の上をみる。

……うわあ、沢山監視カメラがあるう。

コイツで生徒一人一人を見てる、と。

こりや迂闊なこと出来ないね。

あれ？ 授業中の私語とかもコイツで見られてるから……。

あつ。

「……先生、もしかして授業中とかに”学生に相応しくないこと、例えば私語や居眠り”をしたら毎月振り込まれるポイントの額が減ったりしますか？」

「答えられません」

……星之宮先生は満足そうな表情を浮かべながらそう言う。

ビンゴ、つて訳か。

この学校、中々厳しいと見た。

「もう質問はありませんか？」

「はい。質問に答えてくれてありがとうございます」

「どういたしました。では、話の続きに戻ります。本校は実力で生徒を測る方針を取っています。この学校に入るための入試を経て入学を果たした時点で、皆さんには10万ポイント分の価値と可能性があると学校は判断しています。あと、ポイントは卒業後には全て学校側が回収する決まりになっています。あと、ポイントは卒業後には全て学校的に、どのようにポイントを使うかは皆さんの自由ですが、不要だと判断すれば、誰かに譲渡しても構いません。しかし、恐喝やカツアゲをしてポイントを巻き上げるようなことはしないでください。私からは以上です。それでは皆さん、入学式の会場へと向かってください」

そう言つて、星之宮先生は教室から出て行った。

さて、私も入学式に向かうかあ。

Bクラスの生徒たちが先ほどの星之宮先生の話に出てきた衝撃的な事実の数々についてワイワイと話しているのを尻目に、教室を後にする。

ちなみに、入学式特有らしいお偉いさんの話は死ぬほどつまらな  
かったという報告をここに記す。

### 第三話 他クラス偵察

《3—1 一之瀬帆波の独白①》

「よしっ、やり直すぞ！」

そんな強い意気込みをして私は高度育成高等学校行きのバスに乗り込んだ

のだけど……。

「……」

今、私の心の中には不安な気持ちでいっぱいになっていた。

最初の意気込みはとっくに何処かへと行ってしまっていた。

心を沈めるために、ボーっと外の方を眺める。

……ダメだ、全く効果がない。

「ん？」

そんな時、突然私の左肩に何かが当たった感覚。

窓の景色から目を離し、そつちを見ると……。

「すう……すう」

右側の髪をサイドテールにしてまとめている、金髪ロングの美少女が私の左肩を枕にして気持ち良さそうにして寝ていた。

入学式の日の朝から寝ているなんて……不思議な子。

「……ふふっ」

これが私と霧ヶ峰さんとの出会いだった。

《3—2 敗北者(?)》

どうやら初日に授業はないようで、入学式が終わった後に教室に戻ると最低限の連絡事項だけ生徒たちに伝えて星之宮先生は教室から出て行った。

よし、やりたい事がまだまだあるからさっさと帰るとしよう。

「ねえねえ、これからこのカフェに行かない？」

「あー、いいねいいね」

「私もさんせー」

……にしても、周りの生徒たちがめっちゃくちゃ仲良くなってるんだ

え？ 何があつたのさ？

思い当たるフシが……いや、あつたわ。

入学式前に、先生の話が終わつた瞬間、私は教室に後にした。入学式が始まるまでまだ一時間くらい余裕があつたのに。

恐らく、この1時間の間に自己紹介だのなんだの色々したのだらう。

そして、今に至る……と。

いやだって、どこにどんな施設があつたか知りたかつたから色んなところ周りながら行きたかつたんよ……。

と、心の中で言い訳をした。

……虚しい。

ああ、やらかした。

完全に友達を作る機会を逃した。

……いや、私には一之瀬さんがいる。

私の友達、今のところ彼女だけだけど。

少数精鋭、良い響きだ。

その一之瀬さんは他の人と既にどっかに行つたけど。

悲しいなあああ！

ま、まあ、今からやりたい事は人が居ない方が良いでしょう？

ま、負け惜しみなんかじゃやないんだからね！

さて、脳内一人茶番とかいう誰も幸せにならないものはそろそろ辞めて、用事を済ませに行くとしよう。

さあ、他クラスの偵察へレッツゴー。

### 《3—3 偵察》

まずは、将来私が目指したい……というより目指さなければならぬAクラスを覗こう。

中から見えないように角から……チラッ。

「誰もいない……」

中には誰にも居なかつた。

流石、(多分) 優等生クラス。

帰る速度も最優らしい。

はい次。

次は……Cクラス。

チラツとな。

「ええ……」

私はいつから不良ものドラマを見ていたのだろうか？

いいや、現実に戻ってきなさい、私。

どうやら、現在Cクラスは実写版大乱闘スマッシュブラザーズをしているらしい。

やんちやも程々にね、手遅れな気がするけど。

さあ、最後はDクラス……は、中を覗かなくていいや。外から見ても分かる。

ウチと同じくワイワイと賑やかに下校してますな。

……ただ、ウチのクラスよりハメを外しているような。

ふーむ、まあ今はいいや。

さて、私も帰るか。

## 第四話 パルチザン育成計画（前編）

さて、私は学校から自身の部屋がある寮へと向かっているのだが……。

いやあ、仲良く談笑している一年生グループが多くて……辛いつすわ。

「……チツ、クソが」

そんな平和でノホホーンとした雰囲気の中、顔の一部にアザが出来ている黒髪の男子生徒がイラつきながら歩いていた。

あの人は……一年生かな？

ちよつち聞いてみるか。

「あの一、すみません、そこの方」

そう言いながら、その男子生徒の肩をチョンチョンとつつく。

「あ？ 誰だお前……？」

……ちよつ、圧が。

初手威圧とか平和的じゃないなあ。

「えーっと、1年Bクラスの霧ヶ峰ひびきです」

「……なんだ、Bクラスのヤツか。悪かったな、態度悪くて。俺は1年

Cクラスの石崎大地だ。よろしくな」

「ええ、こちらこそよろしくお願ひします」

お？ 意外と優しい。

不良だけど話せば分かる系か？

あと、一年生だったね。

Cクラスでその傷つてことは……彼、石崎君はさっきの大乱闘の被害者か。

……ふーん。

使えるかもね、石崎君。

私は、周囲に監視カメラがあるのを確認してから柔らかな笑みを浮かべながら口を開く。

「ところで、そのアザはどうしたのですか？ 新学期初日から和やかでは無さそうですが」



「ああ、俺のいるCクラスでな……龍園とかいうヤツが”俺がこのクラスの王だ”とかほざきやがってよ。それにイラツときちまった俺がソイツを殴りに行ったら返り討ちにあっちまったんだ。ああ、思い出したらまたムカついてきた！」

「そ、そっか」

龍園……ね、要注意人物として脳内メモ帳に名前を記しておこう。にしても……Cクラスの王、か。

このまま放置していたら間違いなく彼は王になれるだろう。

だが……クラス交替の要因になり得るなんらかの戦いがあると睨んでいる私が放置する訳もなく。

ちよーっと、妨害しちやおっと。

ごめんね、龍園君。

「……ねえ、石崎君。もし、龍園に勝てる手段を知ってるって私が言ったら……どうしますか？」

「そうだな。そしたら、今度こそアイツをボコボコにしてやるぜ！  
って、その話……本当か？」

「はい」

そう言いながら、私は軽く頷く。

「そうかそうか……なあ、その手段とやらを教えてくれ！ 頼む！」

と言つて、石崎君は両手を合わせて頭を下げる。

うん、本当に教えられるよ……龍園を倒す方法。

まあ……別にそこまで特別な事って訳でもないが。

ほら、何事も基礎からって言うじゃん？

「……その手段を教えるので、私について来てください」

そう私が言うと、石崎君は分かりやすく嬉しそうな表情を浮かべる。

「おうー！」

さて、入学式前に見つけた監視カメラのない場所……体育館裏へと向かうとしよう。

## 第五話 パルチザン育成計画（後編）

少し薄暗く、人気もない体育館裏へと私と石崎君はたどり着いた。  
うん、やつぱ霧囲気あるね。

そんなどうでもいいことを考えている私に石崎君は問う。

「こんなところまで来たんだ……よっぽど良い手段なんだろうな？」

「ええ……とても確実に、良い成長の機会になる……そんないい手段です」

「そうか。じゃあ、早く教え……ッ☒」

石崎君がそう言い始めたタイミングで、私は後ろを振り返りながら石崎君の身体を蹴り飛ばす。

もちろん、彼の身体に外傷が出来ないように力を調整して。

まさか私が暴力を振るうとは思っていなかったのだろう。

彼は地面とキスをする羽目となった。

「ええ……教えてあげるわ。本気の喧嘩の仕方を……ね？」

彼は立ち上がり、私に思いつきり睨む。

うわあ、その目で人を殺せそー。

どうでもいいけど。

「舐めやがってー！」

さあ、次は彼のターン。

石崎君が私のところへ走って来て、殴りかかる。

彼の瞳を見る……ふむ、狙いは左頬か。

よしっ、当たりに行くこう。

という訳で、私の頬に彼の拳が突き刺さる。

うーん、痛い。

ただ、これでもし仮に石崎君が先生方に泣きついてても問題ないな。

「へっ、どうだ！ 奇襲だったからさつきは……って、うおおー！」

いつまでも私の頬を触られているのも腹立たしいので、彼の腕を掴み背負い投げをする。

彼の身体が地面に叩きつけられる。

自力で立ち上がれないのか、石崎君は立ちあがろうともしない。

「クツソ……お前さてはわざと避けなかったな……てか、もしかして最初の蹴りも手加減してたか？」

「あ、分かっちゃう？」

「喧嘩の経験だけはたくさんあるからな。にしても、お前の実力は底知れねえな。あの龍園よりよっぽどつええよ。何者だ？」

「ただの……か弱い女子だよ」

「んな訳はねえだろ！ バカな俺だって分かる」

うるせえ！

私は極々普通の乙女なんだよ!!

まあ、それはいいや。良くはないけど。

「それは置いといて……続き、どうする？ やる？」

「……そうだな。なあ、霧ヶ峰。いや、霧ヶ峰さん」

石崎君はやたら神妙な顔をして、そう言う。

「うん？」

「俺を……弟子にしてくれ……してください！ 霧ヶ峰さんの言う本気の喧嘩のやり方ってヤツを知りたい……んです！ そうすればあの龍園にも勝てる気がするんです！」

「……うん、いいよ！ 元からそうするつもりだったしね。じゃ、まずは立ち上がろっか」

石崎君の手を掴んで、引っ張り上げる。

……よしよし、立ち上がれたね。

「じゃあ、早速教えてくださいー！」

「ええ……君、さっきまで立てなかったでしょ。休みなよ……」

「いや、まだまだ行けます！ というより、一つ聞いていいですか？」

「？ どうしたの？」

「口調、変わりましたよね？ 俺を蹴り飛ばす前まで丁寧な口調でしたけど」

ああ、そのこと。

そんなの、簡単な話だ。

「猫被ってただけ。コッチが素だよ」

いちいち丁寧口調とかめんどくさくて仕方ない。

でもまあ、初対面で馴れ馴れしいのもあれだし……って訳でさつきまでは丁寧口調を使ってた訳だ。

もう、石崎君には使う気ないけど。

「そすか。じゃ、教えてくださいよー!」

……めちやくちや目を輝かせてるんだが。

なんだろう……ヒーローを見る子供みたい。

ふふん、ここまで期待された目をされたら頑張って教えるしかないね!

「そうだね、じゃあまずは隙を少なくしてみよつか。さっきの石崎君のパンチは大振りすぎたから、ええつとここを……こうして……そうそう。それから……!」

この後、私は石崎君を夕方までボコボコに……いや、石崎君を夕方まで教育した。

## 第六話 決まらぬ覚悟

《6—1 綾小路清隆の独白》

オレは、初めての学校生活に多少浮かれつつも常に一定度の緊張を  
持っていた。

理由としては簡単。

この高度育成高等学校が何の変哲もない普通の学校と言うことは  
考えられないからだ。

あの真つ白な部屋から逃げ出した後、オレ……いや、オレ達を匿つ  
てくれたあの人が進めた学校だ。

絶対に何か、普通の学校とは違う場所とか違うはずだ。

……にしても、オレはあの親子からたくさんモノを得た。

今のオレがああの部屋に帰ることはもう二度とないだろう。

《6—2 弱い心》

「……うーん、どうしよつかなあ」

私はベッドに飛び込んで、枕を抱きしめながらそう呟く。

先ほど、石崎君という他クラスに介入出来る駒を手に入れた私では  
あるのだが……それに関することで悩んでいることがある。

石崎君のスペックが低いとか、そう言うことではない。

むしろ石崎君の能力は思ったより高かった。

あの調子で行けば、恐らくあと数日もすれば成立するのがほぼ確実  
であるCクラスの龍園政権に対する叛逆を一週間で実行に移せるだ  
ろう。

まあ、それはいいや。

私が今悩んでいることは……私が今後どこまでやるか、だ。

この学校で何らかの形で着たクラス同士が競い合うことは、お父様  
や星之宮先生の発言からほぼ確実だろう。

そして、クラス同士が争うということは各クラスにクラスの方針を  
定めて生徒たちを導くクラスリーダーが必要であることを意味する。

Cクラスの”王”を自称する龍園のように。

で、今のところ私が属するBクラスにクラスリーダーは現れていない。

となると、誰かがBクラスのリーダーにならねばならない訳だが……その座に私がつくかつかないかで悩んでいる。

もしBクラスのリーダーに私があれば、今日手に入れた駒である石崎君を動かしやすいくなるし、Bクラスを一年以内にAクラスに出来る自信がある。

お父様に教育された私より優秀なのは……綾小路清隆君くらいだろうし、リーダーとしての能力的には私が圧勝だろう。

ただ……私は……。

……よし、とりあえずどう転んでもいいように色々準備をしつつ、様子見をしよう。

もし、Bクラスにそれなりに優秀なクラスリーダーが現れたら私の上に立たずとも大丈夫だろう。

もちろんその場合、そのクラスリーダーを陰ながら支えたりはするさ。

これで大丈夫……大丈夫。

「……また、私は逃げたんだ」

そんな呟きが口から漏れたが、それをまるでなかった事にするように私は目を瞑った。

私は……才能も境遇も望んでないのに、どうして皆んな……。

## 第七話 偽りの蒼穹

「……………」

自然と目が覚めた。

目を擦りながら身体を起こす。

時間は…………4時30分。

これは驚きの早さですわ。

まあ、昨日寝たのが17時だからなあ…………嫌なこと考えたあとそのまま寝ちやっただよね。

にしても、お腹すいた。

そりやそうだ、昨日お昼ご飯も夜ご飯も食べてないもん…………我ながら頭おかしい。

とりあえず、シャワー浴びて、歯磨きして、髪を解かしてから制服を着る。

…………さて、24時間営業のブラック企業の王ことコンビニに行くか。

朝ご飯食べたいし…………にしても、なんか目が変なんだよなあ。なんでだれ？

…………あつ、カラコン付けたまま寝たのか。

やつば、とりあえず洗面台の鏡を…………よし、私の右目の瞳は青色だ。つまり、カラコンが目玉の裏に行ったりはしてない。

とりあえず、カラコンを外して…………専用の液体に浸しておく。さて、コンビニに行こうか。

鏡には、右目の赤い瞳が映っていた。

赤い瞳は…………私があの一族の一人である証。

それに比べて、左目の青色の瞳は良い。

青い瞳は、小市民である証だから。

コンビニに入ると、まず目に入るのはレジの前にいる明らかにやる気のない店員一人。

そして、次に目に入るのが。

「無料、ねえ」

無料商品スペース、か。

割とポイント厳しいのかしら？　いくらポイント変動があるとはいえ……。

何がこの先に待ち受けているのやら。

まあ、そんな事は今は良いんだよ。

まずは今日の朝ご飯だ。

あくまで、朝ご飯だから重いのは避けたい。

となると、やっぱりパンかなー。

私は、コーンパンとチョコクロワッサンをレジに持って行く。

「あー、こちらのカードリーダーに携帯端末をかざしてください」

バイトさんに言われた通りにかざしてみると……。

「おお、ほんとにちゃんと使える」

ピロン♪ という機械音がして、ちゃんとポイントでパンが購入された。

使えるとは言われてたけど、いざ使えるのを自分の目で見ると謎の感動を感じる。

いや、日頃から使ってるPa○Payとかと大して変わらないはずなのにね。

さてさて、コンビニから出て、目の前にあるベンチに座ってパンを食べる。

……まあ、普通のパン。

当たり前か。

パンをモツキユモツキユと咀嚼しながら空を見た。

おー、ちやうど夜明けね。

綺麗……。

にしても、細かい今後の方針どうしよっかな？

……うーむ、よしっ。



「手駒を増やそう」

クラスリーダーになるにしろならないにしろ、他クラスの手駒はクラス間の競争に役に立つ。

やる事はいつもと同じだ。

敵を私の親愛なる民草に変える。

簡単なことだ。

## 第八話 本能の赴くままに

さて、なんやかんやあって1ヶ月くらい経過した。

今は5月1日。

恐らく、今日の朝のホームルームで教師からこの学校における特別なシステムのネタバラシがあると思われる日だ。

今日に至るまで、色々あった。

龍園政権が確立したCクラスが再び分裂したり、ただでさえ葛城派と坂柳派に分裂しているAクラスでさらに神室真澄をリーダーとする中立派が出現したり……本当に色々であったがこれらの出来事に問題はない。

全て計画通りだ。

……他のクラスの生徒を何人か駒にするってのは私がやろうと思っただけのことだ。

でも、ここまでやる必要は……まだなかったはずだった。

……はあ、霧ヶ峰<sup>お</sup>先生。あなたの教育<sup>せんのう</sup>は正しかったよ。

おかげで、私自身の意思とは関係なく、着々と学年支配への布石を打ってたよ、私の身体は。

まあ、終わったことは仕方ない。

そんな事を考えながら、自分の席に座る。

「……ねえ、霧ヶ峰さん」

私の元に一之瀬さんが訪れる。

「どうしましたか？」

彼女は一瞬不安そうな表情を見せたが、すぐにその表情を消して口を開く。

「私たちのクラスは……上手くやれたのかな？」

表情は取り繕えているが、言葉までは繕えなかった。

彼女はきつと不安なのだろう、ここまで暫定クラスリーダーとして皆を率いた者として。

その気持ちは凄く分かる……でも、安心して？

あなたは……。

「大丈夫ですよ、ちゃんと8万ポイントくらい振り込まれたのですから。一之瀬さんは頑張ったと思いますよ?」

「そっか、うんそうだね。ありがとう、霧ヶ峰さん」

「はい、皆さん! 席についてくださいーい!」

……と、めちやくちや元気な星之宮先生が教室に入ってきた。

いや、何があつたし……。

「えっと、何か良いことでもあつたんですか、先生?」

前の席の女子生徒が尋ねる。

いや、ほんとに気になる。

「それはすぐに分かりますよ。はい、じゃあまずはクラスポイントを公開するよー。……はい、これがSシステムで算出された来月の分のポイントです。あと、質問のある人はあとで職員室に来てくださいー」

星之宮先生がホワイトボードにペンで文字を書いていく。

内容は以下の通りだ。

一学年クラスポイント一覧

Aクラス 910

Bクラス 820

Cクラス 440

Dクラス 0

生徒全員がこれを見たのを確認したのちに、星之宮先生が再び口を開く。

「では、みんなが疑問に思っているであろうクラスポイントとSシステムについて説明します。まず、クラスポイント、略してCPは簡単に言うとクラスの成績を表しています。このCPに100をかけたものが毎月支給されるプライベートポイント、略してPPの額になります。だから、みんなの学生証端末に今月分の8万2000PPが振り込まれています。ちなみに、入学時には全クラスが1000CPに設定されています」

やっぱりそんな感じか。

私の予想通りだ。初日に私が質問していたおかげで、ほとんどの生徒が真面目に授業を受けていたが……180CP引かれちゃったかあ。

まあ、仕方ないのかな？

「そして、このCPは学生らしくない生徒の授業態度や行動をとると減らされていきます。4月の1年Bクラスの場合は、遅刻・欠席3回、授業中の私語1回、授業中に学生証端末をいじっていた等の回数が12回……これらのことを考慮して180CPの減点という判断を私たちは下しました」

いや、その判断基準でDクラス何をやったらこうなったんだ……

——1000CPって何さ？ ある意味天才でしょ。

あとで、櫛田さんにも聞いてみよう。

「ただ、この時期のBクラスの減点が180ですんだのはかなり優秀な成績と言えます。頑張りましたね」

ああ、機嫌良かった理由はそう言う。

そりゃ、自分のクラスの成績が良かったら嬉しいわよね。

「ところで、この各クラスのクラスポイントを見て、何か気づいたことはありませんか？」

「……クラスポイントの値がやたら綺麗ですね」

そう私が言う。

「良い着眼点ですね、霧ヶ峰さん。これを見て分かる通り、最も優秀な生徒たちがAクラスへと、逆に最も不出来な生徒たちがDクラスへと配属されます。そして、Bクラスは最優のAクラスに最も近いクラスです。頑張つてAクラスのCPを超えてください。そうすればあなた達が新たなAクラスです」

……なるほど。私はお父様のヒントのおかげで気づいてたからそこまで衝撃的じゃないけど、他の人にはすごい衝撃的な事実なんだろうね。

クラスなんて適当に決めるケースの方が多いだろうし。

にしても、この星之宮先生の発言って、逆に言うところC、Dクラスに

転落することもあるってことだよね。

そこも気をつけないと。

「ちなみに、この学校の謳い文句である《望む進学先・就職先をほぼ100%叶える》って言う恩恵はAクラス卒業者でしか受けられないから気をつけてね」

今まで黙って先生の話しを聞いていたBクラスの生徒たち。

しかし、この事実の露呈は流石に効いたらしく、小声で多くの生徒が話し始めた。

「はい、一旦静かにしてください。……次に先日行った小テストの結果を公表します」

あ、あの最後の3問だけやたら難しかったあのテストの成績って公表されるんだ。

そんなことを思っている間に、星之宮先生はBクラスの生徒の各科目の小テストの点数が記されている紙をホワイトボードに貼り付けた。

私の名前は一番上にあつた。

点数は……全科目100点。

うん、もう実力隠して裏方に徹するのは諦めたからね、これでよし。本当は、よくはないが。

「うん、赤点はいないみたいですね。そんなこのクラスには不要な情報かもしれないですが、この学校では赤点を取った生徒は即退学です。で、気をつけてください」

うん、厳しくない？

普通の学校はそこまで厳しくないと聞いているが。

国立の学校怖い。

「最後に、月末の中間テストについて軽く説明します。この月末に実施される中間テストの成績次第ではCPが増加します。範囲は後ほど連絡します。この中間テストで、あなた達全員が高得点を取れる方法が必ずあると私は確信しています。頑張ってください。では、これで朝のSHRを終わります」

……さて、先生は教室に出て行った。

その直後に、私の学生証端末に沢山のメールが複数人から届く。概ね計画通り、C、Dクラスに対するBクラスの優位は確立された。そして、Aクラスとの差もまあまあと言ったところだ。私は、抜けがないかどうか昨日までの行動を振り返り始めた。

## 第九話 ネタバラシ

さあ、この1ヶ月で何をしていたかを早速振り返ろう。

入学から2日目にとりあえずA、Dクラスの生徒（Cクラスの生徒はとりあえず石崎君で足りてるので増やさなかった）を駒にするという方針を立てた私は、AクラスとDクラスの情報を集め始めた。

それから2日もすればこの2つのクラスの詳しい内情は判明した。そしてそれらの集めた情報を元にA、C、Dクラスに対して色々としたのだが……まずはAクラスに対する工作について話そう。

Aクラスはリーダー格の生徒が2人いて、対立構造が出来上がっているということが分かった。

そして、そのどちらの派閥にも属さない生徒も少数ながらいることも判明。

この、どちらの主流派閥にも属さずに中立を貫いている生徒たちをある程度組織化したいと考えた私は、ある人物に目をつける。

それがAクラスの女子、神室真澄だ。

どうやら彼女はAクラスの中で孤立しているらしく、とても接触しやすかった。まさしく、理想の人物。

彼女を可能な限り付け回して、彼女が万引きする瞬間を動画に収め、それを使って、彼女と交渉。

無事、神室さんは私の駒になった。

それから、彼女を突貫工事でかろうじてリーダーとして振る舞えるように（石崎君と同時並行で）教育して、Aクラスの第三勢力”中立派”を結成することが出来た。

中立派はリーダーの神室さんを含めて6人の弱小派閥であり、主流派である葛城派や坂柳派と比べると影響力は微々たるものだが、今後主流派がやらかした時の受け皿となれる事を考えると、結構成長の芽はあるだろう。

次に、Dクラスについてだが……このクラスには大した工作はしていない。

理由は単純、そもそもクラス崩壊を起こしているから（今は）工作

する必要がなかったのだ。

実際、OCPだし。

とは言え、彼がいる以上ここから盛り返してくるのは確実なので、いつでも情報を得たり、内部工作が出来るように1人くらいはDクラスから駒が欲しかった。

そんなことを考えながら外を歩いていたある夜、人気のない場所で堀北鈴音なる人物の悪口を叫びながら柵を蹴り飛ばしている櫛田桔梗を見つけた。

櫛田さんは、恐らく一年生の全生徒が知っているほどの有名人だ。

彼女は、学校中のみならず友達になることを目標としていて、彼女が属しているDクラス以外のクラスや他学年の生徒たちとも広く交流を持っている、誰に対しても気配りが出来る天使のような美少女というイメージを皆に持たれていた訳だが……それは幻想だったという訳だ。

この情報は使える、そう思った私は、罵詈雑言を吐いている彼女の声を録音した上で、交渉。

無事、櫛田さんは私の駒になった。

交友関係の広い彼女から得た情報は、自クラスでの私の影響力拡大やその私の傀儡である石崎君や神室さんのC、Aクラスでの影響力拡大に多いに役立った。

最後に、Cクラスに対して私が行ったことだが……石崎君の身体的・知能的な能力向上を行ったただけだ。

あとは、彼が勝手にCクラスの王たる龍園翔に対して反旗を翻したという訳だ。

そしてその結果、無事Cクラスは龍園派と石崎派に分裂した。

少なくともこの内戦が終わるまで、私は石崎君の師匠としてCクラスに干渉出来るだろう。

これらが私が5月1日までの間に、秘密裏に行ってきた事だ。

あとは……。

私がBクラスの王になるだけだ。



## 第十話 失墜のトリガー

……過去を省みるのを中止。

現在に戻ってくるとしよう。

いかに衝撃的な出来事があっても学校の授業は一切変わりなく進行して行く。

そして、5月1日の全ての授業が終了し、今まさに星之宮先生の話も終わったところだ。

いつもならクラスメイトはさっさと教室を後にする所だが……。

「みんな、ちよつと話を聞いてくれないかな？」

一之瀬さんが教壇の上に立って、そう呼びかける。

クラスの1／3の生徒は一之瀬さんが言うならという感じで席に座ったままで言う。

そして、クラスの2／3の生徒は私が座ったままなのを確認してから座ったままでいることを決める。

……まあ、こんなもんか、一週間とちよつとの期間じゃ。

櫛田さんから情報を聞いて、今まで女子を中心にBクラスの生徒たちに尽くして来たんだが……いや、知らなかったとは言え自己紹介をバックれた私にしてはかなり良い成果……なのだろうか？

普通の人間、それも学生と接したことなんて片手で数えられる程度だから分からない。

友達も……人生で2人しかいないし。

それは置いておこう。

一之瀬さんは話を続ける。

ちなみに、星之宮先生はまだ教室にいる。

端っこの方だけだ。

……ちやんと、契約通りだ。

「私は、これから各クラス間同士の争い……クラス間闘争が激化すると思うんだ。そして、そのクラス間闘争で有利に立ち回るためにこのクラスの指針を決めるリーダーを選出する必要があると思う。でも、クラスの皆んなの意見を蔑ろにするのは絶対にダメ。だから、これか

らBクラスのリーダーを多数決で決めようと思うんだけど……じゃあ、そもそもクラスリーダーを選ぶことに賛成の人は手を上げてくれないかな？」

これは全員が手を上げる。

誰だつて分かる話だが、組織がなけりや戦いを生き残るなんて無理な話だ。秩序が保てないからね。そして、その組織にはリーダーという部品が必要だ。

これが分からないという人は、無政府主義者かなんかなだろう。「うん、みんながクラスリーダーを決めたいっていうのは分かった。次は誰をリーダーにするか、だね。クラスリーダーに自ら立候補する人はいるかな？」

……。

誰一人として手を上げない。

私は本来あげるべきなのだろうが……やたら手が重く感じ、上げられなかった。

これが、私の意志と本能に齟齬が生じている影響か。

「にやはは……やっぱいいない、か。じゃあ、誰がリーダーに向いてると思う？」

ここで、神崎隆二という男子生徒と白波千尋という女子生徒の二人が手を挙げる。

「そうだね……まずは白波さんは誰がリーダーに相應しいと思うのかな？」

「私は……一之瀬さんがリーダーに相應しいと思うの。賢いし、優しい……」

ま、彼女が一之瀬さんを推すのは知っていた。

明らかに、一之瀬さんのこと好きだしなあ……友達的な意味でか恋愛的な意味でかまでは知らないが。

「うーん、私はそこまで凄い人じゃないんだけど……分かったよ。白波さんは私を推すんだね。じゃあ、神崎君はどうかな？」

「俺は、霧ヶ峰がリーダーに向いてると思う。小テストの成績は学年トップで人の感情を読み取る能力も突出している」

「なるほどね、神崎君は霧ヶ峰さんを推すと。他に誰かいないかな？」  
もう手を挙げる人は出てこない。

それを確認した一之瀬さんは口を開く。

「じゃあ、私と霧ヶ峰さんのどっちがリーダーに相応しいかで決戦投票をしようかな？ それでいいかな、霧ヶ峰さん？」

「ええ、構いませんが……少し、皆んなの前で話をしてもいいですか？」

「うん、大丈夫だよ」

その言葉を聞いた私は、紙の束が沢山入っているバッグを手にとつて教壇へと歩み始める。

さあ、今こそ楽にしてあげるよ。

1ヶ月という短い間だったけど、クラスのリーダーをやってくれてありがとう。

偽りのリーダー、一之瀬帆波。

君は、君の背丈にあった地位に戻るべきだ。

私は教壇にたどり着く。

クラスメイト達の方を向く。

そして、一度深呼吸。

私の自我を奥へと追いやって、本能に後の行動を委ねる。

準備完了。

私は口を開く。

## 第十一話 Bクラスの王

「……まずは私をよく知らない方々のために自己紹介を。私は霧ヶ峰ひびきと申します。趣味は読書とかですね。よく聞かれるので、先に行っておくと私は日本の方に養子として引き取らせたドイツ系外国人です。これからよろしくお願いします」

そう言って、軽く頭を下げる。

「やっぱり、霧ヶ峰さんは海外の人だったんだ。なんか、日本人ぽくないなあとは思ってたんだよねー」

と、一之瀬さんが言う。

まあ、明らかに欧州系の顔してるからね、私。

そして、ハーフではない。

お父様はそもそも結婚してないからね。

「言う機会がなくて……もうちょっと早めに言うべきでしたよね」

一之瀬さんの方を向いてそう言う。

それからまた、生徒たちの方に向き直り、口を開く。

「さて、私が何者かは最低限お分かりいただけただけはまずです。それでは本題に移りましょう」

ここで一旦区切り、息を大きく吸い込む。

そして、先ほどよりも大きな声で再び話し始める。

バッグに入っていた紙の束の一つを手に取り、掲げながら。

「私がこのクラスのリーダーになれば、こちらの中間テスト対策の問題集を配布します！ ちなみに、こちらの問題集は自作ではありませんが、中間テスト対策として効果的であることは星之宮先生が確認済みです！」

「確かに、私は霧ヶ峰さんの作った問題集を確認しました。そして、この問題集をキチンとやり込めば、中間テスト対策にもなるでしょう」  
先生のお墨付き、というのが真実であると分かった瞬間、今まで一之瀬さんをリーダーに推していたクラスの1/3が目に見えて動揺し始めた。

うん、5000+16000ポイントを支払ったかいがあったわ

ね。

ちなみに、内訳は5000ポイントを星之宮先生に、16000ポイントを3年生の先輩に支払った。

この出費で、問題集の信頼性と過去問を獲得出来た。

いい買い物だった。

「私の話は以上です。では一之瀬さん、続きをどうぞ」

私は、一之瀬派瓦解作戦がちゃんと成功した嬉しさとで内心ウキウキしながら自分の席に戻って座る。

もちろん、表に出してニヤけたりはしていない……はず。

「じゃあ、リーダー決めを決選投票を始めるよ。……霧ヶ峰さんが言いたいと思う人、手を上げて」

クラスの大半の生徒が手を挙げる。

挙げなかった人は……5、6人つてところか。

ちゃんと、白波さんは上げてなかった。

「……霧ヶ峰さんがBクラスのリーダーで確定だね、おめでとう」

「ありがとう、一之瀬さん」

……圧勝だ。

これで、私は無事Bクラスの王に即位した。

一之瀬さんの敗因は……月日が短かった、これに尽きると思う。

彼女は決して無能ではない、むしろ有能である。

彼女は人の心を掌握することに関してはピカイチである。

しかも、無自覚でやっている……恐ろしい。

ただ、私たちはクラスメイトになってから今はまだ1ヶ月しか立っていない。

もしこれがさらに2ヶ月とか経っていれば話は違うだろうが、どれだけ優れた人心掌握能力があってもたかが1ヶ月なら信頼や友情よりも利益の方が勝る……この学校なら尚更。

それに一之瀬さんは……リーダーをやるには綺麗すぎる。

クラスメイトに問題集を配りながら、私はそんな事を考えていた。

## 第十二話 優秀な参謀の確保

《12-1 榎田桔梗の独白》

私は今度こそ、学校のみんなの信頼を得ようと努力した。めんどくさい性格をしているブスの話も親身に聞いたし、顔面偏差値底辺のキモい男子の手を握ったりもした。

変態共の視線も耐えた。

笑顔を決して絶やさなかった。

優しい榎田桔梗という像を崩すような事は、中学生時代の反省をいかして出来る限り避けた。

でも……そんな努力は早速意味をなさなくなった。

誰もいない場所で、ストレス発散をしていた私の姿をたまたまBクラスの霧ヶ峰とかいう女子に見られたのだ。

さらに、それだけに留まらず彼女は私が本性を現している姿を収めた動画をネタに私に取引を持ち出して来たのだ。

「さあ、榎田さん。取引をしましょう……ハイかイエスで答えてね？」

これが、私と彼女の最悪な出会いだった。

《12-2》

「いやー、この問題集ほんとに凄いなー」

一之瀬さんと2人での学校からの帰り道、ペラペラと私が配った問題集をめくりながらそう一之瀬さんが言う。

まあ、これ作るために結構徹夜したし、色々な公式問題集を見るために図書館にもかなり通ったから……出来がよくないと困る。

それはそうと、一つ聞いとかなないといけない事がある。

「あの、一之瀬さん」

「うん？ どうしたの？」

「一応、聞いときたいのだけれど……一之瀬さんって、クラスリーダーになりたかった？」

うん、これは大事な要素だ。

一之瀬さんが、リーダーを自分からやりたいと思ってたのか、思ってたなかったのか。

これを聞かないことには、一之瀬さんの今後のポジションを決められない。

「あー、その話かあ。……私は別になりたかった訳じゃないよ。白波さんは、ああ言ってたけど、私にそんな……人の上に立つ資格なんてないよ」

一瞬、遠くを見るような表情を見せながら、彼女はそう答える。

ふうむ、あの表情……彼女は恐らく過去になんかあったんだろうなあ。

まあ、もつと仲良くなつてからそれは聞くことにしましょう。

「そつか。ねえ、一之瀬さん。私の参謀になつてくれないかな？ 君はとても優秀だ。頭もいいし、人をまとめる能力も高い。だから、君が私の元でBクラスを支えてくれれば、Bクラスは本格的にAクラスを撃破することが出来るだろうね」

前も言ったが、彼女は優秀だ。

参謀としては、だが。リーダーの座に彼女を据えるのはちよつと勿体無い。

この1ヶ月間、彼女を見ていて、この結論に私は至った。

だから欲しいのだ、参謀一之瀬帆波が。  
私の王国に。

「にやははは。霧ヶ峰さんも私のこと買い被り過ぎだよ。……私があるあなたの参謀になること、それはBクラスのみんなのためになるんだよね？」

「ええ、もちろん」

「……なら、いいよ。これからよろしくね、霧ヶ峰リーダー」

足を止めて、彼女は手をこちらへと差し出してくる。

その手を私はもちろん握りしめた。



## 第十三話 どうしてこうなった・上

「あ、そうだ。ちよつと霧ヶ峰さんの部屋にお邪魔してもいいかな？ちよつと今度の中間テスト対策について話し合いたいことがあるて」

ある日の放課後、一緒に帰っていた一之瀬さんが私にそう言う。ふむ、まあ中間テスト対策についてなら他のクラスに聞かれない方がいいから誰かの部屋でするのが妥当か。

でも、なんで私の部屋なんだろう……別に一之瀬さんの部屋でも。

あ、彼女、人気者なんだった。

私と違って、損得抜きの本物の友情で繋がってるからなあ。多分、訪問者も多いのだろう。

だから、私と秘密の話なんて出来ないって訳だ……いや、私の想像だけ。

私の頬をそよ風が優しく撫でる。

5月だつていうのに、やけに肌寒く感じた。

「うん、いいよ。じゃあ、行こうか」

やはり、一之瀬さんの方が立派なのだろう。

彼女は、本心からクラスに尽くしてる。

でも、私は……仕方ないからやっている。

この差は大きいだろう、間違いない。

ああ、一之瀬さんに私の才能も、血のしがらみも、要らないモノ全部全部、押し付けてしまいたい。

そんな欲望を抑え込みながら、彼女と共に私の部屋へと向かった。

それから、5分くらい彼女と談笑しながら歩いていたら私の部屋へとたどり着いた。

さて、私は初めてマトモな友達を自分の部屋に入れる（櫛田さんや

ら神室さんを招き入れた事は何度かあるが弱みをダシに私に有利な形で契約した人間を友達とは言わないだろう) 訳だが……若干緊張する。

片付けは……大丈夫、なはず。

掃除も……昨日したばかりだからオツケー、なはず。

お茶は……ないな、うん。コーヒーも紅茶も緑茶もない。エナドリならあるけど……来客に出すもんじゃないわね。

水で我慢してもらおう。

「へー、霧ヶ峰さんって最上階の部屋なんだ」

「そうだよー。いちいちここまで上がってくるのがちよつと面倒くさいね」

「にやはは、確かにそれはあるかもね」

「じゃあ、一之瀬さん、どうぞ」

私はそう言ってドアノブをひねって、扉を開く。

「おじやましまーす」

そう言って、一之瀬さんが玄関に足を一步踏み入れた瞬間。

「おかえり、霧ヶ峰さんって……あれ？」

私の部屋の奥から櫛田さんが顔をひよっこりと出しているではないですか。  
………つて。

「は？　なんで……？」

”なんで”の後に続く言葉であった”この時間にいるのよ”を言うのはなんとか抑えたけど……いやはや、なんでいるんだ???

「え、えーつと、霧ヶ峰さんは櫛田さんがいる事は……」

「知らなかったよ」

「あ、悪い。オレも居るぞ」

と、櫛田さんの後ろからさらに無気力そうな顔をしている男子生徒、綾小路清隆が姿を見せる。

嫌な予感がして、横の一之瀬さんの方を見る。

「男子1人と女子2人が同じ部屋に……こ、これって禁断の……にや、にやあ／＼／」

「いや、それは違う」

私たち3人の声が被った。

にしても、禁断の恋って……一之瀬さんって意外と頭ピンク？

## 第十三話 どうしてこうなった・下

とりあえず、その場しのぎではあるがどうか一之瀬さんの頭をピンク色から遠ざけたあと、私たち4人は部屋に入った。

「……清隆くんは櫛田さん。なんで、私の部屋に居るの?」

私は彼らに天然水の入ったコップを配りながら、最大の疑問を彼ら2人に尋ねる。

ほんとになんで居るんだ……特に清隆くん。

それなりの仲の相手とはいえ、付き合ってたたりする訳でもない女子の部屋に勝手に入るなどあれほど……。

「あ、私は綾小路くんに頼まれただけだよ。女子の部屋に男が勝手に入るのはダメだから女子に着いてきて欲しいってね」

なるほど、考えたなあ……。

女子を連れ込めば男子”だけが”入った訳じゃない、と。

いや、普通に考えたら結論がそうはならないでしょう……なってるんだけどさ。

ホワイトルームは常識をまず教えよ?

「……清隆くん、ないわ」

私は思わずそう呟く。

それを聞いた彼は顔の表情を一切変えずに口を開く。

「これもダメか……」

いや、当たり前だろ。

ホワイトルームは何を教えてたんですかねエ……。

ん? 待てよ。

そもそも、私は部屋に鍵をかけてたはず。なんで、彼ら2人は入ってるんだ?

「そう言えば、どうやって鍵を開けたの?」

「それはだな……」

彼はチラッと櫛田さんの方を見る。

え? 櫛田さんがなんかやったの???

まさか、櫛田さんがピッキングのプロとか?

「えーっと、櫛田さん？」

「あのね……これ、管理人さんに作ってもらったの。ほら、私たちよく遊ぶでしょ？」

櫛田さんがブレザーのポケットから小さな金属物体……私の部屋の鍵と思われるモノを取り出した。

……管理人さんに何も言った覚えもないし、何かを言われた覚えもないんだが。

合鍵、勝手に作れるのかあ。セキュリティどうなってるのさ……。まあとにかく、あとで管理人さんに合鍵を作らないように言っとこ

う。

「ふーん、にしても霧ヶ峰さんって櫛田さんと仲良かったんだ」

お、今まで機能停止をしていた一之瀬さんが復帰したわね。

どうやら、私と櫛田さんとの間に接点があるのが意外らしい。

クラスも違うし、そう思うのも無理はない。

「ちよつと前にカフェで会ってさ。その時にたまたま話したら割と馬があつたんだよね。その後から一緒に遊びに行ったりしてるんだ。そうだよ、櫛田さん？」

嘘しか入ってない……いや、カフェで出会って話したことあるのはホントか。それ、4月の最初の方くらいだった気がするけど、まあ私

の中ではちよつと前判定ということだ。

「うん、そうだね」

……私たち、微笑みながらしれつと嘘つけてるあたり碌でもないな。

今更だけど。

「うーん、まあそういう事もある、のかなあ？」

どうやら、一之瀬さんはまだ私たちの関係の何かに納得できないらしい。

……私たちの契約、今はまだ一之瀬さんにバレる訳にはいかないから、話題変えよ。

「あ、そう言えば清隆くん。わざわざ、私の部屋に来たって事は何か用事があるのかな？」

「露骨だが、焦点を清隆くんに変える。」

頼む、綾小路清隆。爆弾発言で一之瀬さんの注目度を稼いでくれ！

「あー、そうだな。実は霧ヶ峰に話があってきた。……お前が恐らく持っているであろう次の中間テストの過去問を安価で譲って欲しい」